

# 『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会

vol. 7



日時 **12月8日** 場所 **赤羽北区民センター (赤羽北ふれあい館)**  
(日)午後1時15分～4時半  
第1和室(椅子・座布団あり。アクトピア北赤羽六号館3階)  
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分、北区赤羽2-25-8

参加費 **ひとり500円**(要予約)

主催(予約) 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com  
電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。
- 当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。
- あらかじめ対象テキストを読んできてください。



※参加ご希望の方で全訳が読めない方にはメールでおくります。

- 13:30～14:30 **報告 岡崎耕史**(福祉労働者)  
リムガン県エチャグ戦闘 (第2巻第11話) **パク・ソン Chol**
- 14:30～15:30 **報告 キム・ヨンイル**(福祉労働者)  
革命のつぼみたち (第4巻第29話) **パク・ヨンスン**  
革命の暴風雨の中で育ち、  
勇敢に闘った児童団員たち (第11巻第16話) **ファン・スニ**
- 15:45～16:30 **討議**

第1回読書会(昨年5月20日)で、「回想記」の歴史的背景、朝鮮人民の抗日革命闘争史を学んだ私たちは、第2回(8月13日)、第3回(12月2日)、第4回(4月6日)で各自が選んだ回想記について報告、討議を続けてきました。

第5回(6月30日)、第6回(9月15日)は、梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』を学び、日本の労働者のなかにある民族排外主義を克服し、朝鮮人

民との組織的な連帯をめざす歴史的な手がかりを探りました。

抗日パルチザン闘争と在日朝鮮人運動から先人の闘いを知り、学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。国際主義の伝統はどこにあったのか。労働者に国境はありません。なぜいがみあい対立しなければならないのか、どうすれば手を繋ぐことができるのか。ともに読み、考え、話し合ひましょう。

## 『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒  
264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



第六回読書会での報告を終えて

労働者人民のインターナショナルリズムを復権させよう

須田光昭

梶村の本のうち「八・一五以後の朝鮮人民」、中でも1945年から朝鮮戦争が始まる1950年までの部分を報告した。私を含む日本人がいかにこの時期の朝鮮人民の苦闘をよく知らないかということを実感した。

ここがわからないと、朝鮮の拉致問題も「ミサイル」問題もその歴史的経緯がわからない。日本政府による朝鮮学校無償化排除の本当の攻撃性もわからない。在日朝鮮人を標的として出発した戦後入管法の本質もわからない。つまり朝鮮と日本の「今」につながる鎖の環がこの5年間ではないか。

日本人が朝鮮現代史を欠落させている原因のひとつに、この時期に存在した在日朝鮮人と日本人が共に闘った歴史を日本共産党が「正史」から抹消していることがあると思う。

在日朝鮮人との連帯のあり

方で日本共産党の側に多くの誤りがあったのは確かだろうが、成果も含めて一切をなかつたことにする清算的な姿勢からは現在への教訓を何も残せない。

また、反帝国主義の立場で命をかけて闘った在日朝鮮人を「共産党に」引き回された」という受け身の存在におとしめる世間の言説にも違和感がある。

梶村は、あの当時の朝鮮人民について国際共産主義運動の指針を朝鮮でも日本でも自分の持ち場でよく担おうとしたと評し、対する日本人は「自分じしんの問題が何であるかさえわかっていなかった」と批判している。同感である。

産湯とともに赤子まで流してはならない。歴史の継承・克服・発展で、労働者人民のインターナショナルリズムを復権させよう。

【2面につづく】

# 共通の敵と立ち向かうために他者を内在的に理解しよう

キム・ヨソイル

本書の構成は大きく三つに分かれる。一つ、朝鮮史を学ぶ上での問題意識と方法論について。二つ、朝鮮民族解放闘争と世界革命運動の交点。そして三つ目、今回取り上げた『八・一五以後の朝鮮人民』は刊行当時における朝鮮現代史となる。

朝鮮現代史を正しく捉えるためには、朝鮮人民の大衆意識は8・15の前と後で切断されていまいし連続性をもっていること、南と北そして在日の歴史は相互に規定し合っていること、そして戦後世界分割において日本戦後史と朝鮮現代史が深く結びついていることを押さえる必要がある。

梶村は、朝鮮人民は解放直後から日帝と闘ってきた指導者とともに朝鮮を建設しようとするが、日本人は敗戦と引揚に伴う被害者意識にひきずられた貧しき戦後体験だつた、という。植民者の子弟であることの負い目からか、それとも自己批判や自己否定といった運動の作風からか、日本人が歩んできた歴史には手厳しい。

日本人民にも、民族解放の歴史が必要であるし、実際にそう言いうる闘いもあつたのではないか。民族解放闘争の質は、支配する側／される側で当然違ってくるだろうが、ここでいう民族とは実存を支えるよすがとしてのアイデンティティのことではない。

人は、主権者であることで加害の側に立つと同時に、統治される者として被害を受ける二重性を持つ。

## 第六回読書会でのキムさん・須田さんの報告をきいて

### 歴史の継承とは清算ではなく誤りも引き継ぐべし

前田年昭

今回、第5回、第6回と連続して梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』を学んだ。著者がこの本を書いた1971年は、在日朝鮮人を収容・強制送還する大村収容所問題など入管闘争が闘われていたころ。当時の青年学生は、朴

慶植『朝鮮人強制連行の記録』(65年)、平岡正明『日本人は中国で何をしたか 中国人大量虐殺の記録』(72年)『中国

憲法を制定する力とは、すなわち革命であり、それを担うのは人民である。そして憲法によって定義され主権者国民となることで、人民のポテンシャルは失われ、革命は下げ止まる。

要は、植民者のくせに民族解放など笑止千万、などと言つてしまえば話はおしまい、何も変わらないのである。

わたしとあなたのあいだにある差異を、普遍的な法則によつて解消しようとするのではなく、引き受けること。自身の主体を問い直すために、他者を内在的に理解しようとする

努めることで、私たちは何度でも出会い直せるはずだ。

人は日本で何をされたか 中国人強制連行の記録(73年)、本多勝一『中国の日本軍』(72年)などを読み、日本の加害の歴史を知った。70年の華青闘(華僑青年闘争委員会)の告発もその流れにあり、差別抑圧者のお前に何がわかつた

言われてたじろぎながらも必死に歴史を知ろうとした。私が阪神教育闘争を知つたのも、地元である尼崎にいた

この頃だった。以来今まで、日本と朝鮮との連帯の希望の灯りとして、この闘いを心に留め置いてきた。日本の学校教育の問題を考えると、阪神教育闘争に対する権力の弾圧は、現在に続く一元的な管理教育の始まりとしてどうしても許すことができない。

また、釜ヶ崎で日雇労働者の労働運動にかかわつた(71年)とき、鈴木組をはじめ直接の交渉相手だった人夫供給業者や手配師の多くが在日朝鮮人であつたことから、労働者が彼らを朝鮮人として侮蔑する事態を目の当たりにして、これは何としてでも変わらなければと思つた。第1回読書会で紹介した「反入管通信」(73年)で船本洲治は花岡事件を採りあげた。悩む私(たち)に手をのばしてくれたのは、在日朝鮮人の人夫出しの女将さんや焼肉屋の親父さん

だった。「あなたが左翼なら、分裂を統一に変えたキム・イ

ルソンと祖国光復会を学びなさい」と言われた私は釜ヶ崎で朝鮮人民の抗日闘争の歴史を学び始めた。彼らは、「お前に何がわかるか」と言つて壁をつくることはせず、総連系民団系を問わず学習に必要な手助けをしてくれた。だから私も「わかるはずもない」と口をつぐんでしまうのでなく、歴史を知ろうと思つた。「回想

記」を全訳した鈴木武さんらとの74〜75年の朝鮮語の勉強会も、並行してやつたチュチェ思想研究会も同じ問題意識からだった。労働者のなかにある排外主義、朝鮮差別を克服したい、反体制運動のなかにある分裂と対立を克服したい、という二つの強い問題意識を、当時から今にいたるまで持ち続けている。そのどちらも、ひとつも解決してないことを思うと、歯噛みするほど悔しい。

『排外主義克服のための朝鮮史』には、この時代の雰囲気の色濃く反映している。朝鮮人民の抗日闘争の生命力と

は対比的に、日本の運動に「厳しい」評価がなされているのは、日本人としての自責の感情と責任感からくる思いによるのだろう(当時の入管闘争では、コミンテルンや日本共産党の「政治利用主義」に対する告発や批判が主流だった)。今回、読書会で読み直して

みて、改めてその「時代の刻印」を再確認するともに、労働者人民の闘いは利用したり利用されたりするようなものではなく、自主的な闘いの歴史を持つていると思えたことは、ひとつの収穫だった。

その典型が、第6回読書会で須田さんが紹介した『ある被抑圧者の手記』(86年、新地平社)である。金相泰は「利

用されたとか利用したという関係は、私は間違つていると思う。例えば、日本人の中にも日本共産党の綱領をモスクワで作つたとか、上海から持つて来たとか、それは間違つてあつたと否定してしまつて

いる場合があります。しかし、そうなのではなく、その時はそれしか出来なかつたのだということだと思ひます」と述べ、「民族的といつても根底は階級的」と強調したが、戦前の全協(日本労働組合全国協議会)の闘いには、日本人と朝鮮人との連帯した国際主義が確かに存在していた。

半世紀を経て、朝鮮学校無償化排除抗議の金曜行動に参加しながら、私が強く思うことは、阪神教育闘争が在日朝鮮人運動のなかでは連綿と語り継がれているのに、日本の労働運動、反体制運動のなかでは忘れ去られている(ようにみえる)のはなぜか、という

ことである。

民族といつても抑圧民族と被抑圧民族とは同じではない。しかしなお「民族解放」を共通の旗印にして闘つた全協から阪神教育闘争へのかつて

の歴史を、国際主義の伝統として再発見、復権し、引き継ぎたい。積極面を含め一切を否定する歴史清算主義は、手をつないで連帯する道をふさぐ

ことにしかならないと思う。